



人生の三角波シリーズ

# 人間到る処 青山あり

第4回

## フリーのフォト・ジャーナリスト として

※三角波：時化た海で方向の違う二つ以上の波が重なってできる三角形の波で、船の舵が取れなくなる危険な状態を言う  
※人間到る処青山あり：死して骨を埋める場所は至るところにある。故郷を出て活躍すべきだとの意。

フォト・ジャーナリストの加藤節雄さんを以前から存じ上げていたが、人生経験をうかがう機会には恵まれずにいた。昨年、加藤さんが日本の文化を英国に紹介されてきた功績で外務大臣賞を受賞され、その際に披露された経歴をぜひもっと詳しくお聞かせいただきたいということでこの対談が実現した。

(センターピープル代表取締役 飯塚忠治)



飯塚 前号では日本にシルさんと帰国、晴れてご結婚ということで、充実した生活を始められたようにお聞きしましたが？

加藤 日本では3年ほどフリーランスとして海外取材の仕事などをして、メディア業界では知名度も上がってきましたが、シルから英国に戻りたいと打ち明けられ、1977年に英国に再び戻りました。その際は旅人ではなく、英国で生活をするという大きな目的がありましたから、すごく責任を感じていたことを今でも思い出します。まだ若いときですから、かなり気負っていたところも、振り返ってみればあったかもしれませんが。

飯塚 1977年と言えば日本経済が急速に伸び、海外に目を向け始めた黎明期と言ってもいい時代だったように思いますが、それでも英国でのジャーナリストとしての基盤が整っていない状況では不安もあったのでは？

加藤 日本での3年間のフリーランスの仕事で培った経験と、人と人のネットワークが非常に役に立ちました。日本のあらゆるメディア(新聞、雑誌、テレビ、ラジオ、書籍)から取材依頼があり、記事と写真の両刀使いという便利な存在でしたから、日本のメディアにとっては結構ありがたい人間だったのではないかと思います。例えば週刊ポストには記事を書き、週刊文春には写真を掲載するといった感じていた。英国にはフリー

の日本人ジャーナリストは私を除いてほとんどいなかったような時代でしたから、とにかく目が回るほど忙しかったです。

飯塚 ここで特に思い出に残っている取材と、これはひとつだったと今だからこそご紹介いただけることはありますか。

加藤 北海油田や、英国が漁業権をめぐりアイスランドと争ったタラ戦争、国境問題を抱えるジブラルタル、「がんの最前線」という医学物からヨーロッパの小国シリーズといった風物詩のまで、とにかくありとあらゆる取材をしました。よく覚えているのは、マーガレット・サッチャー首相(当時)の選挙戦の密着取材や、チャールズ皇太子とダイアナさんの結婚。オックスフォード大学に留学された日本の皇太子殿下は、入学から卒業されて英国を離れるまで、英国各地やオーストラリアまで出掛けて取材をしました。また新潮社からスコッチ・モルトウイスキーの取材を依頼され、6週間かけて全120蒸留所を完全踏破したのも今となっては良い思い出です。朝日新聞発行の「アエラ」のホームレス取材では、隠し撮りで撮影したホームレスのグループに追っかけられたり、ギリシャ側から入ったキプロスの難民取材では、国境の緊張地帯でカメラのモーター・ドライブが銃撃音に聞こえたのか、いきなりトルコ側の兵士から銃を向けられたこともありました。

飯塚 英国に住む日本人の目を見た英国現代史のひとコマですね。ところでフリー・ジャーナリストのカーテンの内側はどんな感じでしたか。

加藤 当時はパリへの日帰り取材もユーロスターのない時代ですから、帰宅するとへとへとでした。でも翌日はスペインへ、そのあとはスコットランドへと、一年に20回も欧州を中心とした取材旅行がありましたから、想像してみてください、寝るヒマさえなかったくらいです。カメラマンが取材している場面だけを見れば、自由気ままないい仕事に思えるかもしれませんが、内情に目をやれば、取材旅行のアレンジ、宿泊先や交通機関の

鉄道のレールは前に伸びているが、目の前が崖だったら？

ときには崖のような困難を飛び越えつつ、文字通りシベリア横断鉄道を使って英国にやって来たフォト・ジャーナリストの加藤節雄さん。「フリーランスの仕事は決して『フリー』な状況ではないですよ」——1970年代からフリーのジャーナリストとして英国で活躍する加藤さんの半生の紆余曲折を振り返る。全5回シリーズ。

### 加藤 節雄さん プロフィール

1941年……………5月5日端午の節句に東京に生まれる  
1966年……………早稲田大学新聞学科卒業  
1966～69年………キーストン通信社東京支局でフォト・ジャーナリストとして勤務  
1970～90年………フリーランス・ジャーナリストとして英国、欧州のニュース・トピックスを日本のメディアに提供  
1991～2002年………在英邦人向け情報紙「日英タイムス」の編集長として活躍  
現在……………日本クラブ会報「びっくべん」編集長、日本クラブ理事。著書多数



手配、カメラの準備(機材の点検、フィルム、バッテリーの準備)など、挙げればきりがありません。取材後もフィルム現像、整理、キャプション……すみません、これ以上並べると原稿のスペースがなくなりそうですね。そしてカメラ機材一式の重量が20キロもありますから、もうこれは肉体労働です。しかも、仕事をスムーズに運ぶために一年に3回くらい日本へ帰国して、編集者とのミーティングや情報交換、次の仕事の打ち合わせが必要だったりして、それはもう大変な仕事なんです。

飯塚 そのころの加藤さんのご活躍の様子を遠くから眺めると華やかに見えたことと思いますが、そうでもない？

加藤 80年代になりますと日本はバブルの時代に入ると、それがメディアにも及んだ時代でした。まず、フリーのジャーナリストは依頼された仕事は何としても断れない、断ってしまったら次が来ないという強迫観念に襲われるのです。私の場合は一つの専門分野ではなく、ありとあらゆる分野の取材でしたから、フリーランスという言葉からはかけ離れた大変な努力が必要でちっともフリーではなかったですね。しかも体調を崩せば仕事もできなくなるし、誰かが仕事を保証してくれるわけでもありません。

飯塚 話をお聞きしているだけで私も疲労困憊!

加藤 「もうもない!!」そんな身体からの叫びが聞こえ出して……。



加藤節雄さんの著書

本コラムの過去記事は、下記アドレスでご参照いただけます  
[www.centrepeople.com/japanese/article](http://www.centrepeople.com/japanese/article)

Presented by  
**centre people**  
Recruitment Consultants

情報を発信し続けるセンターピープルは、人材紹介、派遣のエキスパートです。  
誠意をもって心をこめたサービスを企業様、ご登録者の皆様に提供することを常に目指しております。